
ポケモン『タケシ』

(^)y-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン『タケシ』

【Nコード】

N7193B

【作者名】

(^) y -

【あらすじ】

あのポケットモンスターがもし、本当に実写でやっているとしたら？その中にでている『タケシ』の苦悩を描いてみました。何故自分は演技を始めたのか？自分は本当に演技が好きなのか？自分が忘れてしまった大切な理由とは？思い悩むタケシが見つけた答えとは？楽しく読んで下さい。

（前書き）

この物語はフィクションであり、
実在の人物・団体・事件・地名等
とはいっさい関係ありません。

ここはいつものポケモン収録現場。

夕暮れ時の小高い丘。

出演者達の熱の籠った演技が続き、今回の話は遂にラストシーンを残すのみとなっていた。

「さようなら！ジュンサーさん！」

赤い帽子をかぶり、肩にピカチュウを乗せた男が警官の服装をしている女にむかって大きく手を振る。

警官役の女も、肩にピカチュウを乗せている男に大きく手を振りかえし、

「気をつけてねー！サトシ君！」

この話の事件と一緒に解決してくれたことへの感謝を込め、大きな声で男の旅の安全を祈る。

「はい！ありがとうございます！……………おい、タケシ、次お前の台詞だろ？」

サトシと呼ばれていた男は自分の隣に居る背の高い男に囁いた。

「え？あつ、そっか、えっと、ジュ、ジュンサーさん！このタケシを…」

「カットカットカットカットカットカット！……！カメラ止めてー」

撮影が行われている中、突然監督の声で一事中断される。

出演者やスタッフの全員が何故止められたかわかっていた。

タケシだ。

「タケシ君、駄目じゃないか！ちゃんとやってくんないや！」

「すみません…」

「謝って済む問題じゃないだろ？……ていつか何度目のNGだよ？
こっちは真剣に仕事やってんだよ！やる気が無いなら辞めちまえ！」

タケシはわかっている。

自分が監督、出演者やスタッフの全員に何度も迷惑をかけていることをわかっている。

だからこのポケモンが始まってから、何度目になるかわからない程下げた頭をもう一度下げる。

ひたすら頭を下げる。

「すみませんでした…」

平身低頭、頭を下げるタケシに呆れたとか、諦めたのか、監督は肩をすくませる。

「たくつ…今度はちゃんとやってくれよな！…あと、このままじゃ周りに示しがないから終わった後おれの部屋に来いよ！」

「…はい」

「はあ……………んじゃラストシーンの初めのところからいってみよか！」

『はい！』

監督の気合いを入れ直すような掛け声で出演者やスタッフ達が声を合わせて元気に応える。

一人を除いて。

なんとかラストシーンの撮影を終えて今日の撮影はお開きになった。

飲みに行くもの、デートに行くもの、愛しの家族の元に帰るもの。様々な人間、ポケモンが予定より遅くなってしまった撮影が終わったことに喜び、一人また一人。一匹また一匹と撮影現場を後にしていく。

しかし、その楽しい空気が流れている中一人だけ浮かぬ顔で現場の監督室に残っている男がいた。

タケシである。

「はあ…タケシ君！ちゃんとやってくんなきゃ駄目じゃないか！いい加減やつてもらっちゃこっちも困るんだよ！」

「すみませんでした」

「だから謝って済む問題じゃ無いって言ってるでしょ！？こっちはちゃんと行動で示して欲しい訳！行動で！！」

「すみません……でも、自分は演技が苦手で…」

「苦手も糞もあるかよ！タケシ君、プロでしょ！？プロならプロらしくちゃんとした演技をしてくれよ！あの普段の性格が最低なピカチュウでさえ、ちゃんとカメラがまわってるところじゃ愛想を振り撒いてんだからさー！なんでできないのかな！？」

（確かにピカチュウの演技は上手い。一緒にでている自分が驚く位だ。……でも、自分は、自分はあるそこまで器用になれない）

だから

頭を下げる。

「すみませんでした…」

子供のころから演じることは下手だった。

でも、誰かに、自分ではない誰かになるという高揚感はたまらなく、病み付きになってしまい、そしてもう一つの“大切な理由”があり、この道を選んだ。

そして、運よくポケモンのオーディションに受かり、これから自分の大好きな演技を死ぬまでやってやる！と意気込んだ矢先に…失敗、失敗失敗の連続。

このポケモンの撮影に入ってからはその“大切な理由”も忘れてしまった。

今では演技よりお辞儀の仕方の方が上手くなってしまう始末である。

(…自分は何でこの仕事をしているのだろうか？)

「……やんとやれって言ってるだよ！…ん？おい、聞いているのか！？」

「あ、はい！すみません」

(謝る演技だったら完璧なのになあ…)

監督の説教は延々3時間も続いた。

「もう一杯、なんか適当に作ってくれよ」

「お客様、少し飲みすぎですよ」

「うるさーい。これが飲まずにいられるかっての…」

「はあ…かしこまりました」

ここはポケモンの撮影現場から程近いバー。

中はとてもレトロな雰囲気で一昔前にタイムスリップしたように錯覚させられる。

タケシはどうしても酒をあまりたくなり、たいして強くもないアルコール類をそのゆつくりと雰囲気のバーで浴びる程飲んでいた。

「……今日はどうしたんですか？貴方のような有名人が、御一人でカクテルを飲みにくるなんて」

有名人が来たことに始めは戸惑っていたが、やっと落ち着きを取り戻し、バーテンダーの男はいつもの抜群の営業スマイルで、カウンターで今、入れたばかりのカクテルを一気に飲んでいるタケシに聞く。

「……………」

無言

「何か御悩みことでしたら話せば多少、気が紛れるかもしれませんよ？…丁度この店に御客様は御一人ですし」

「……………」

やはり無言

バーテンダーは無言を貫き通すタケシに気にした風もなく、グラスを磨きだした。

タケシは有名人だ。なにせあのポケモンにでている役者である。
人に言えない悩みの一つや二つあるし、一人で飲みたい日もある、
とバーテンダーは判断したのだろう。

一つ目のグラスを磨き終わり。

二つ目。

三つ目。

…を磨き終えた時。

ゆっくりと今まで無言を貫いていたタケシの口が、

「……………自分は」

開かれた

「…はい」

「自分は何の為に演技をしていたのか忘れてしまったのです」

ゆっくりと自分で自分の言葉確かめるように

「…はい」

「昔、思い出せたんです。…いや、思い出せたというより知っていた。という方が正しいですかね…」

このお店の空気のようにゆっくりと

「…忘れてしまわれたのですか？」

「そうですね…忘れてしまいました。…今では自分が演技をすることが好きだったかどうかわかりません」

「…演技をするのが嫌いになってしまったのですか？」

タケシはそこで少し黙り、中身の入っていない目の前にある、綺麗なクテルグラスを手持ち無沙太というようにいじりだす。
そしてある程度時間たち、タケシは口を開いた。

「…嫌いでは、ないと…思います…昔から、演じる…ひぐつ、ことが好きで、うう…、好きだったはずで、ひぐつ、…でも今は本当に好きだったかどうか、わかりません…」

顔が赤いのは酔っているだけではないのだろう。

途中で何度もつかえながらタケシは自分の抱えている思いを独り言のように告げた。

『……………』

両者無言

この店は一人の男が鼻をすする音だけが木霊する。

また、ある程度時間たち、鼻をすする音がする中、今度はバーテンダーが口を開く。

「私は、カクテルを創る事が好きです。色々な味や色があり、とても楽しいです。」

「……は？」

「そして、何よりカクテル自体がとても好きです」

「……いや、よく意味が」

鼻をすすりながらも急に変な事を言いはじめたバーテンダーに顔をしかめるタケシ。

「御客様は演劇は好きですか？」

「い、いや、だから、わからないと言ってるじゃないですか」

タケシは困惑する。今まで自分が言ってることをこのバーテンダーは理解していなかったのか？と

「いえ、演技をするのが好きかどうかではなく、“演劇が好きか”を聞いているのです」

「……………あ」

タケシの顔が何かに気付いたような顔に変わった。

「私は昔、ある方にカクテルを作って頂いて、その時のカクテルが本当においしくて、とても幸せな気分になりました……もし、こんな風な気分沢山の人をしてあげられたらと思ってバーテンダーになったんです……御客様は何故俳優に成られたのですか？」

最高の笑顔で微笑みかけてくるバーテンダー。

だがタケシにはその微笑みが見えない。

涙が流れ見ることができない。

それは十年も前のお話。

一人の口下手な少年が何の因果か学生劇の準主役に抜擢されてしまった。

落ち込んでも仕方ないと割りきった少年はみんな迷惑をかけないように色々な演劇を見た。

そして、感動した。

自分にもこんな演技できたら。

自分にもこんな演劇を魅せることができれば。

だから、喋るのが苦手だった少年は一生懸命練習して。

毎日毎日声が渴れるまで練習して。

そして

「うう…ひぐつ、じ、自分は演劇が、す、好きになって、演技が、か、感動し、したと、い、言ってもらえたんだ…だ、だから、それが、た、大切な理由だった、うう、ううう…」

大切な理由を思い出し、泣いてしまい意味が通じないような言葉。

でも、それでも

「私は御客様の演技がとても好きです。周りとの協調性持ち、出べき所はでていて、そして抑えるべき所抑える。また、いかにも不器用だけどまっすぐそうで、人がとても良さそう人柄。……貴方の演技、そして人物としても、とても素晴らしいと私は思います」

通じる人には通じるものである。

「うう、ううう、ひぐう…あ、ありがとうございます」

「…いえ」

『……………』

今日3度目の、ある程度の時間たち、鼻をすする音が少しずつ小さくなってゆく。

そしてタケシはフフツツと一回笑った後にバーテンダーに言う。

「今日はありがとうございました！これから最高の脇役を目指して頑張っていきます！！」

まだ、瞼は赤いものの嬉しそうに言うタケシ。

しかし、

「違います」

「へ？何が違うですか？」

「貴方は主役ですよ」

「へ？え？い、いや、でも」

タケシ自身もわかつている。自分が主役な訳がなく、これから先も多分一生、主役をやることは無い。
タケシ自身が一番それをわかつている。

バーテンダーはタケシの困惑な顔を見てフツツと笑い、

「最後に一杯いかがですか？」

とその言葉で益々困惑な顔を深めるタケシに言った。

意味はわからないが、自分の“大切な理由”を思い出させてくれた恩人だ。

はい、とうなずくしかない。

一つのカクテルを手早く作り終え新しいグラスに入れタケシに差し出した。

「どうぞ」

「はあ……」

バーテンダーの意図が読めずタケシの困惑は続く。

「綺麗な色ですね？」

「はい、もうすぐ春なのでピンク色のカクテルにしてみました」

「では、頂きます」

一口。

二口。

そして口をグラスから離す。

「いかがですか？」

「……美味しい。アルコールが全然入ってなくて、なんていうか、そのかわりに色々な物が沢山入っている感じです」

「その通りです。アルコールは余り入っておらず、色々なものがアルコールが無いことを補い、全部で一つの作品を作りあげているのです」

「…一つの作品を？」

「ええ。名前を“one in all”と言います。全てで一つ。私は、

全員が主役。

そう解釈しています」

（後書き）

いかがでしたでしょうか（^ー^；）??この物語はこないだ妹と一緒にポケモンを見てて思いついた物です。あの脇役であるタケシをどうにか主役としてあつかいたい!!と…無理矢理してみました（
| - ;）もしよければ感想をよろしくお願いしますm（| - ;）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7193b/>

ポケモン『タケシ』

2010年10月15日01時13分発行